題字：住職

ほのぼの

第８号
平成16年
11月

発　行
神戸市須磨区戎町１－２－３
TEL　078－732－5209
信行寺門信徒会

阿弥陀さま、はじめまして

初参式（はつまいり）

東京の築地別院で、狂言師の和泉元彌さんの長男さんの初参式がいとなまれたことが、テレビなどでも報道されました。

初参式（はつまいり）というのは、阿弥陀如来の前において新しい生命の誕生を喜び、お念仏のかおる環境で、ちいさな生命が、すこやかに育って行くように願う人生最初の大切な儀式です。

信行寺でも、三好よしゑさんのひい孫の陽人（はると）ちゃんの初参式が、十月三日、本堂でいとなまれました。ひい孫さんの初めてのお参りです。仏教讃歌「小さきあこに」の流れるなか、式は始まり、参拝者みんなでお勤めをし、その後小さな手にお数珠をかけました。

人間として生まれることはきわめて難しく、仏法にあうのはさらに難しいことです。今、ここにお念仏の人生が始まりました。おめでとう。

報恩講とは

【問い】　毎年お寺から「親鸞聖人報恩講」の案内状がきますが、どんな法要ですか。ことばの意味もよく分かりませんので、お参りする気持にならないのですが。

【答え】　自分に与えられた「めぐみ」を「恩」といいます。

その「めぐみ」を知り、与えてくれた人の気持ちに「こたえる」のが「報」です。

そして、恩にこたえようとする人々の「集まり、つどい」を「講」というのです。

つまり、「めぐみを与えてくださった、親鸞聖人のお心に、こたえようとする人々の特別なつどい」が「報恩講」という法要です。

【問い】　「自分に与えられためぐみ」といわれますが、わたしは、親鸞聖人に「めぐみ」をいただいているようには思いません。どんな「めぐみ」ですか。

【答え】　気づいていなくても、「めぐみ」を受けていることは、日常いくらでもあることです。たとえば、空気がなければ、生きておれません。太陽も、水もそうです。なによりも、親がこの世に生んでくれなければ、今ここに、生きてはいませんね。このように、「めぐみ」を受けておりながら気づいていないことはいくらでもあります。

如来さまや親鸞聖人の「めぐみ」もそうです。

【問い】　言われてみますと、その通りです。なぜ気づかないのでしょうか。

【答え】　「めぐみ」が大きすぎると分かりにくいものです。さらに、「めぐみ」を当り前と思っていると気づきにくいものです。

「恩を受けておりながら、それを知らない者は、畜生よりも劣る」ということがいわれます。つまり、恩を受けておりながらそれにこたえないのは、人間として恥ずかしいことだということです。

【問い】　親鸞聖人はどのような「めぐみ」を、わたしたちに与えてくださったのでしょうか。

【答え】　聖人は、「生まれてきてよかった。生きていてよかった。これで生きていける。これで死んでゆける」といえる人生を、歩むことができる方法を、わたしたち一般の人間に、初めて教えてくださいました。

【問い】　「初めて教えてくださった」とは、どういうことですか。

【答え】　日本に伝えられた仏教は、一般の人にはほど遠いものでした。対象が貴族や才能のある優秀な人、しかも男性に限られていたのです。阿弥陀如来のお力によって、「いつでも、だれでも、充実した人生が歩める」（仏さまに成れる人生が歩める）ことを説くのが浄土真宗です。

これを明らかにされたのが親鸞聖人です。これによって、すべての人々を救いとるという阿弥陀さまの願いが満たされたのです。

【問い】　それで、親鸞聖人報恩講というのですか。

【答え】　そうです。親鸞聖人のご命日を縁として、そのご恩をしのび、聖人の生涯に、わたし自身の人生のありようを学び、仏さまのお心をいただき、お念仏を伝えさせていただく特別の法要が、親鸞聖人報恩講です。

親鸞聖人のあゆまれた生涯

【9歳で出家・得度する】

親鸞聖人は、一一七三年、源氏と平氏が相争う時代に、京都の日野の里にお生まれになりました。幼くして両親と別れたため、世の無情を感じられて、わずか9歳の身で東山の青蓮院にて出家得度されました。

親鸞得度の図

西本願寺蔵『親鸞伝絵』より

【比叡山での命がけの修行】

比叡山に登り20年間、修行と勉学に励まれました。しかし、修行をつめばつむほど、あさましい心が見えてくるばかりでした。そこで、万人が救われる道を求めて、29歳のとき山を降りられました。

【29歳、恩師法然上人に出遇う】

悩み抜かれた聖人は、京都の六角堂に100日こもられました。

そして、吉水の法然上人が、お念仏の道を説かれるのにあい、上人を生涯の師とされました。

【35歳、弾圧をうけ 越後へ流罪となる】

法然上人の説く他力念仏の教えは、世の無常と人生の不安を感じていた多くの人々に信じられていきました。しかし、他の宗派の非難が強くなり、一二〇七年、念仏禁止の弾圧が加えられ、聖人は越後へ、法然上人は土佐へ流罪の身となられました。

【越後から常陸へ】

聖人は流罪を機に愚禿釈親鸞と名のられ、5年後、罪をゆるされ、42歳ころ越後から常陸の国へ移られ、この地で、20年にわたって他力のお念仏を伝えられました。

【京都に帰る】

62、3歳ころ、京都に帰られました。住居も定まらない中で、人々のために、ひたすら著述に励まれました。また、常陸の人々に、お手紙でお念仏のかなめを説かれました。

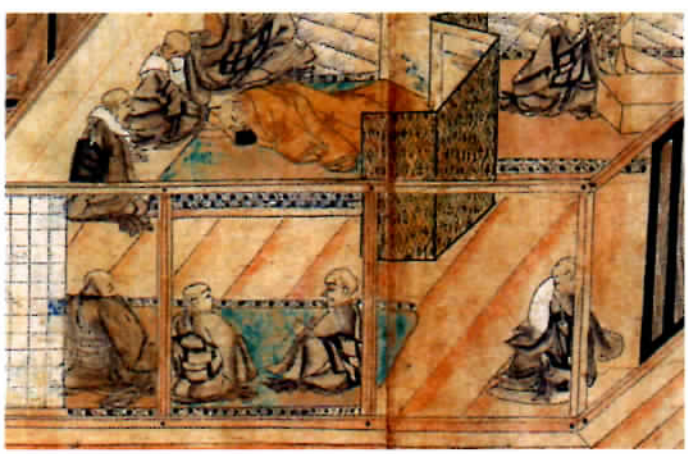
84歳のとき、わが子の善鸞さんを断腸の思いで、義絶するという悲しい出来事もありました。

弁円、稲田草庵を襲う図
『親鸞聖人絵伝』より

【90歳で聖人往生される】

一二六二年、聖人は90歳でお念仏のうちにお浄土へ往生されました。

九〇年におよぶご生涯は、苦難の道でした。しかし、阿弥陀さまのお心を信じ、お念仏に生かされる人生は、輝かしいものでした。そのあゆみは、後に生まれてきたわたしたちに、人生のありようを教え、阿弥陀如来のお心を伝えてくださって、生きる力と優しさをあたえてくださいます。



広島より
海宝寺のみなさんが
信行寺に参拝

さる十月五日、広島より海宝寺仏教婦人会の34名の方が信行寺にお参りにこられました。

なごやかな笑顔の中、本堂ではおつとめと法話。ひき続き、礼拝堂で信行寺のみやび会のみなさまと一緒になって、〝しんらんさま〟などの仏教讃歌をうたい、なごやかな楽しい交歓会を持ちました。

遠く離れた人達でも、お念仏をいただく者同志、心の通じ合うものがあるとつくづく感じました。

文芸欄

縁起聞く　本堂暗く　紅葉冷

行秋の　旅路峠を　あまた越え

紅葉晴　茶店の人と　称へ合ひ

林道に　落石注意　冬に入る

翳(かげ)りきて　広き境内　冬ざるる

釜江　喜代子

兵庫教区

「御同朋総結集一万人大会」開催！

今年は、十月三十一日、神戸ウイングスタジアムで「一万人大会」が開催されました。教区内のみなさんが、ともどもにお念仏の慶びを分かち合うなかで、御同朋の社会実現の方向を確かめ合う集いとなりました。

信行寺からも、三十名が参加しました。この大会に、新門様のご臨席を仰ぎ、お念仏をよりどころとし、親鸞聖人の、み教えに問い、聞いていく営みを通じて、将来の展望を開くことになったものと思います。

なお、憩いのひととき、杉 良太郎氏の「トーク」では、自らの体験から「福祉の大切さ」などを知らされ、八〇〇人コーラスには、「信行寺コーラス部・みやび会」の皆さんも参加され、この大会に花を添えられました。

合 掌

スローガン

「聞こう伝えよう

阿弥陀仏のこころ」

「ほのぼの」の編集に参加して

仏縁を頂くようになって、早や七年となりました。寺報「ほのぼの」の編集という私にとってあまりにも重責な仕事を引き受け、長井さん、月田さんの御指導のもと、新しい知識を得、尊い経験をしています。心の友として一人でも多くの方に親しまれる「ほのぼの」の発展のため、未熟ですが頑張ります。宜敷くお願い致します。

泉井玲子

「ほのぼの」第七号から参加させて頂く事になって、早、もう二回目の配布となりました。「私に充分なお手伝いができるのだろうか」と不安いっぱいのスタートでした。今まで何気なく見ていた寺報も、毎回の記事集め、経験豊かなレイアウトなど、感心しつつ、多くの方に喜んでもらえる寺報作りを勉強させて頂いております。

中川さなみ

「思い出の写真」から

長井輝子

松本こなみ様（住職の右隣り）平成九年に故人となられましたが震災前の信行寺本堂で米寿の会をささやかに行った時の写真です。私が存じ上げているのは昭和五十六年から震災までしたが、ずっと以前から寺の庫裡、特にお斎のこと一切をなさって居られたそうです。穏やかなお人柄とやさしいお話ぶりが印象的でした。「してあげるではなく、仏様にさせて頂いている」が身についている良き大先輩でした。

合掌

ご案内コーナー

12月18日・19日

報恩講法要

18日（土）午後2時～
法話　住職

19日（日）午後2時～
法話　天岸浄円先生

1月5日
午後1時～

新春初法座

年の始めをご一緒にお祝いしましょう

法話・住職
（正信偈のおつとめ）

編集後記

今回は「報恩講」を特集しました。何げなく、お参りしていましたが、この法要は私達・門信徒にとって、大切な意義深いものであります。聖人の「御絵伝」を本堂にかけております。みなさま、お揃いあわせて「報恩講」にお参り下さい。

編集委員一同